

## オウム真理教問題の哲学的分析 —哲学的分析による「オウム」批判—

93K035 金子 美由紀

### 序

今年(1995年)3月20日に突如東京を襲った「地下鉄サリン事件」以降、何かと取り沙汰されるオウム真理教。

警察の一斉捜査の手が入ると同時に、その報道の過激さはさらに増した。しかし、オウム真理教についての情報は大量に垂れ流しに報道されても、根本的な問題を納得させてくれる情報は微量たるものであった。

我々が抱く問題の一つには、なぜ宗教集団が無差別殺人という犯罪を犯し、さらには頭脳明晰な者たちが行なったのかということだろう。

なぜこのような犯罪を犯したのか、ということに関してみても、とにかく彼らがこのような行動に出たのは、彼らの中に共通している「忠誠的概念」があったはずである。

この問題に当たるには、この「忠誠的概念」の根本的思想を見ていかなくてはならないだろう。オウム信者を魅きつけ、オウム真理教を生み出した麻原彰晃の根本的思考とはいったい何であるのか。また、「宗教」とは。

このことについて、西田幾多郎の「純粹経験を(経験)、唯一の实在として(自覚)、全てを説明してみたい(場所)。(『善の研究』序)という哲学的企図を用いたいと思う。この企図を、(A)純粹経験、(B)純粹経験は唯一の实在である、(C)純粹経験を唯一の实在として全てを説明してみたい、の三段階に分けたのは上田閑照(『西田幾多郎を読む』)である。<sup>①</sup>この三分法をオウム真理教の哲学的分析の方法にしたいのである。

### 第1章 「純粹経験」と「終末思想」

オウム真理教の主体となっている麻原彰晃は、彼もしばしば口に出して言うように、チベット仏教に出会うことによって影響を受けており、それがオウム真理教の一つの根になっている。麻原にとってチベット仏教は、西田の哲学的企図の「経験」に相当する。

問題はその後である。西田の哲学的企図の「实在観(自覚)」なくして「場所」が麻原の思想に存在するのである。これが有名な「ハルマゲドン」という終末思想である。麻原の経験がチベット仏教であるならば、キリスト教の思想にある「ハルマゲドン」は出てこないのが普通である。

仏教は基本的に「覚り」の宗教であって、キリスト教の様な「救済宗教」ではない。麻原の主張する「ハルマゲドン」思想は、キリスト教の思想にある「救済」という概念があって初めて成立し得るのだ。

麻原も恐らくはこの問題にぶつかっただろう。終末思想をチベット仏教につなぐ為の理由を

どのようにするか。

結局のところ、彼は次の様な決断をしたのではないだろうか。

仏教の思想の中には「ポア」というものがある。これは早い話、魂をより高い世界に転生させるというものであるが、彼の発言で、「生かしておくが悪行を積み地獄へ落ちてしまう者の命を絶つのは、客観的に見れば殺生だが、別の見方をすれば立派なポアである」というのがある。<sup>(2)</sup> こういった考え方から、彼らから見て、我々の住む社会を「罪深き者たちが住む場所」と考えて「悪社会」として象徴し、「ポア」説を利用してその社会に住む「罪深き人間」を殺すことによって救済するという、「ハルマゲドン」思想とうまく連結させる理論を打ち立てた。それを実現させるために選ばれた方法がサリンであったのだろう。

我々の「社会」を抽象化してしまえば、彼らにとっては同じ人間でありながらも、ただの空虚な実体のないものになってしまう。そこに「ポア」説がプラスされれば、殺人どころかそれが正しい理論に変わるだけでなく、「殺人」という行為をよりやりやすくしてしまうのだ。

しかし、人間には少なくとも、人間であるならば良心の呵責がつきまとうはずである。彼らの「ハルマゲドン思想」という一つの旗の下で、「ポア」の実行のためにはもう一つの動機づけが必要だった。

「良心の呵責」を多少抱きつつも、その感情を抑えて殺人行為を行なわせるために麻原がとった行動は、信者らの、あるいは人間ならば誰にでもあるだろう「心の隙間」につけ込み、空虚からくる何らかの恐怖心を揺さぶり、彼らの「救済を求める心」を利用することだった。

麻原がその点を実に巧妙に利用したのは、彼自身による「救われたいか？ならば私が救ってやろう。そのために、私の言う通りにしなければならぬのだ。」という台詞からも十分に察しがつく。

この言葉に惑わされ、麻原に手玉にとられた信者らを見ても、彼らの中に哲学的なものの考え方が根本的に欠けていることが指摘できるだろう。

ここには、もはや西田の言わんとする「实在観」なるものはなく、「私だけは救われたい」というレヴェルに留まる欲望でしかない。

麻原は、「世界」の説明づけをするための「場所」を「ハルマゲドン」という終末思想で行なおうとした。

しかし、「ハルマゲドン」が実際に起こり得ない極めて不安定な理論であって、そのこと自体がすでに、彼を主体とする「オウム真理教」自体の仮想現実だったとも言えるだろう。

このことから、彼の「純粹経験」であるチベット仏教と「場所」の終末思想をつなぐ「ポア」論も、仮想現実であると言えるだろう。

結果として、「实在観」のない理論が生み出したものは、「仮想現実(Virtual Reality)」の世界であった。

## 第2章「实在観(自覚)」と「場所」

人は誰でも、自分が居られる「場所」を求めている。オウム信者らの入信する動機の大半は、自己把握をする場所を求めて入信したという理由であった。

自己の把握という問題は、同時に「实在観」の問題でもある。特に、社会の構造も生活も複雑化した現代では、なおさら自己をかえりみることは困難である。これだけの豊富な物に恵まれながらも、人間は精神空洞状態を拡大し、心理上の虚無感を感じるようになる。オウム信者

は、これの顕著な例であろう。

確かに、偏差値教育や学歴の偏重の社会を生きてきて、そこに生じた悩みや考え方などに共感できないことはない。

しかし、私がオウム真理教にのめり込めなかった理由の一つには、「個」がないことに加えて、その場所を創造するために用いた手段となる発想が、私の求める思想と袂を分けたからであった。麻原の「経験」によるチベット仏教から、自らの存在を説明する為に用いた「ハルマゲドン」という終末思想が、所詮他力本願的なものでしかないと思ったからである。

なぜ他力本願的なのかと言うと、彼らの行なおうとしたことは、本来ならば我々が求める以前にそこに与えられている「絶対無の場所」<sup>(3)</sup>上に、架空現実的場所を人為的に創造し、二次的に造られた場所を心のよりどころとして依存しようとしていたからである。

依存するというのは、役割が見えていないからするのであって、私の言うところの自力本願とは自己存在の把握という役割を果たすことにある。

仮想現実によって生まれた場所に依存するようになるというのは、結局のところそこには「自覚」がないからである。とすれば、当然「自覚」なければ「実在観」もない。私が彼らと異なる立場に立つものは、彼らの教えのもとにある考え方が、私の「自覚」を認識する為の反省の手段になりえなかったからであった。結局、麻原は「実在観」を得るためのものを、「虚無」から「愛」に転嫁しきっていないのである。

我々が今日あると思っている場所は全て、それらの場所を全て生み出した本家本元の巨大な「絶対無の場所」があることによるのである。これは、自分と同じ人間の中にあるのではなく、住んでいる家でもなく、学校の中などでもない。人間が逆らおうにも逆らえない大きな何かによって支えられているものなのだ。その場所が絶対的に失われることのない場所であるという確信があってこそ、初めて地球という場所、我々の住む国という場所が次々と生じ得るのである。

「絶対無の場所」は、決してゆらぐものではなく、また外的にも内的にも与えられるものではなく、そうなる以前からすでに与えられていたものなのだ。

我々にとって、絶対的な「場所」があることほど有難い「愛」はないのである。それが聖書で言わんとする「神はあなた方が望むものを望む以前に、既に与えていらっしやるのである。」(マタイ6・8)ということであり、パウロの「今日、私がここに在るのは、全て神の恵みによるのである。」(第一コリント15・10)という表現であろう。

この「絶対無の場所」がそこにあることを「自覚」しているからこそ、そこに「実在」しているのであって、そのことがすでに「愛」であり、まさに「絶対的な愛」であると言えるだろう。

これがなければ、全てのことは起こらないのである。このことこそ、「真の実在(The Really Real)」であり、これを踏まえて我々が「自己存在の把握」という役割を果たすことが「自覚」につながるのである。そうすることによって、おのずから「実在観」が生じてくるのである。

「自覚」とは、まさに「場所」あつての物種なのである。

芭蕉はそういったものを、「古池や／蛙とび込む／水の音」と詠んで表わした。<sup>(4)</sup> この句の中では彼は、西田の「自覚」と「場所」の関係を、川にとびこむ蛙を「個物」として、「個即全体」「全体即個」という風に結論づけた。西田も「自覚」は全体が自らを「個」に映し出す

ものであると考へ、「自覚の二重性」を説いている。

麻原は、こういった定義を怠ったために、「宇宙の真相」に迫ることができておらず、それゆえに「虚無感」から抜け出せず、「愛」に転嫁できずに終わってしまっているのである。

麻原がチベット仏教の立場にあるのであれば、彼の状態はいわば「立ち返り」のない「空」に固執したままの状態とどまっているのである。それゆえに、地上に住む世界を「悪」の抽象的概念とすることも可能になり、実体がありながらも実体を持たない世界にしてしまえるのである。

真の解脱をしたのであれば、「空」をさらにもう一度否定し、「二重否定」をして地上に立ち返って来なければならない。彼にはこの「二重否定」による「絶対肯定」が欠けていたために、彼の教義の中にしばしば見られるように、何に対してでも「否定的」なのである。それは、結局彼自身の中に「実在観」がなかったゆえんであり、不安定な「場所」を持つはめになった訳である。

### 第3章「オウム真理教」出現の背景

麻原彰晃の打ち立てた「オウム真理教」が、このような不安定な思想によってできたものであるにもかかわらず、あれだけの信者を従えることができたのは日本の風土的環境にも原因はあるのだろう。

滝沢克己によれば、人間として生きる為の重要な役割は「自己存在の把握」である。<sup>6)</sup> オウムの信者の多くは、そのことのために入信した者もいるだろう。

「自己存在の把握」というのは、「信頼すること」である。麻原の重大な欠点はまさに、この「信頼すること」がなかったことによる。

麻原は恐らく、いったい信頼するに足る権威はあるかという問題を持っていた。「日本国家」の国家権力を信用できない権威として認識し、「悪の国家」、自分たちとは敵対する国家として象徴づけ、信者たちとの結びつきを深めた。

麻原が己自身を「自己絶対化」することによって、「オウム真理教」は「他律的宗教」と化したのであった。「オウム真理教」は、そのために非常に「集団」を重視した。

「集団」を重視することは、「自我」を以って自分の哲学を持つことは和を乱すことであって、良くないものとされる。ゆえに麻原は我を無にする必要性から「解脱」を勧めた。

この辺り、日本の「学校」という一つの組織によく似ている。大量生産が必要な時代には、集団の団結力が必要不可欠であった。物を考えたり、生み出して作り上げる能力を育てる教育は個人を育成してしまうので、駒まわりが悪くなる。そのために一問一答の教育が最良手段としてとられた。確かに、知識を身につけることは悪いことでも、間違ったことでもない。

画一化教育は「集団」を維持するに良い手段であるが、逆に見れば「精神性」「個性」「宗教」「哲学」に対して無秩序な状態になり、かえって危険でもあるのだ。今回の「地下鉄サリン事件」から、「オウム真理教」が絡んだ事件の動機の背景には、こういったものが含まれている。

日本は「安全神話」が謳われた国だが、日本が画一化教育をとった時点ですでに「安全神話」は崩壊していたと考えるべきだったであろう。日本社会の「安全神話」が成立した背景には、多民族国家でなく、農耕民族であったことが一つにはあるだろう。農作業を行なうには「団結力」がものを言った。それゆえに、周囲に迷惑をかけないように心掛けて、和を重んじて来た

ことにもよるだろう。今でも日本人の犯罪抑制の要因は、犯罪を犯せば自分だけでなく、家族、親類、自分の仲間や同僚に迷惑がかかるという連帯責任が占めている。

また「集団」を重んじることは、「内なるもの」と「外なるもの」とに分ける考え方が生まれて来る。<sup>6)</sup>「オウム真理教」の中にも、この考え方はより顕著に現われている。

自分に関係の無い者を排斥することは、日本の社会においては会社でも学校でも、至るところに見ることが出来る。こうした一種の、「排斥主義」は、「オウム真理教」の内部では「日本社会」と完全に断絶することにおいてよく現われている。ゆえに、彼らの教えにある「出家」によって親たちとの縁を切るという思想もまかり通るのである。

画一化教育に加え、「宗教」と「哲学」を学ぶことのなかった多くの日本人にとってみれば、共通した普遍性を持つ「忠誠」を支える思想が何であるのかを知らず、「自己存在の把握」をするための手段を知らなかったことは悲劇であった。

麻原もまた、その一人であっただろう。麻原が自分で作り上げた宗教によって、真に救済されているかは甚だ疑問である。

麻原がとった「洗脳」という手段も、教団内の画一化、統率化を企てる一端であった。「個」の崩壊による「タテの序列」は、余りにも日本的であるといえるだろう。教団内部の幹部らのつながりを見ると、幹部同士「ヨコ」の関係は希薄であり、麻原自身と個人が結びつき、下と下と関係が結びついていることが明らかである。

こういった背景をしょって、「オウム真理教」は日本社会に台頭して来たのである。

#### 第4章「宗教」と「哲学」の重要性

「宗教」と言うと、「信仰の自由」がついてまわる。確かに、どこの宗教を信仰しようと自由であることは当然の権利であるが、重要なことは、「信仰の自由」とは、あくまでも個人の内部での「信仰」のことであって、教団内部の行動全てにおいて自由を規定している訳ではないのである。昨年のイタリアで開かれた宗教者会議の中でローマ法王が述べられた、「宗教を口実にして争うな。慈しみ深い神を信じると言いながら、その神の名で人をあやめるな」<sup>7)</sup>という言葉はそれを指すであろう。この言葉を今回のオウム事件に当てはめてみれば、「チベット仏教を信じると言いながら、その思想にある『ポア』によって人をあやめた」訳である。

こうなってしまったのも、結局は西田の哲学的企図で言うならば「自覚」の喪失であり、滝沢の「自己存在の把握」が人が生きるための役割であるという、役割の「自覚」のなさにあった。

「宗教」とは本来、「自覚」するための、つまりは「自己存在の把握」を認識するための一つの「手段」であるということである。

その「手段」として、キリスト教は「神」という概念をもって認識しようとし、仏教は「空」という概念をもって把握しようとしたのだろう。この点においては、仏教もキリスト教も一寸変わらない共通したものを持っていることが分かる。

キリスト教の例をとってみよう。西田の哲学的企図の第一番目の「経験」は、神に出会うことという、単純な接触である。

「自覚」は、まず人が「自己存在の把握」を行なう際に、我々の今ここにいる事実とは、いったいどこから来るのかという問いかけから始まる。突き詰めて最終的にたどり着いた「場所」自体の存在は、何の力によるのか。これを生み出したものが、キリスト教の場合は「神」であっ

た。つまりは、その「神」を通して、自分がどこから来て、どこに在るのかを「自覚」するのである。その「場所」に相当するのが、「絶対無の場所」なのだ。この様に、キリスト教を例にとってみても、西田の言う「経験」「自覚」「場所」の三本柱が成立しているのである。ここで、麻原のように、「純粹経験」のみで「自覚」することなく「場所」を説明することが出来ないことが分かるだろう。

「宗教」は、「自己存在の把握」だけでなく、本当に実際にある「現実」(The Really Real)は何であるのかを認識する一つの方法なのである。

とすれば、「信仰しなさい」という教えは「自己存在の把握」という役割を果たすことと、「真の实在」を再認識することなのである。そのための手段となる宗教の信仰を、どの宗教にするかは個人の内面での自由であるとしているのであって、果たすべき役割をおごなりにして「信仰」も「宗教」も成り立たないのである。

「オウム真理教」には、これらが完全に欠如していた。鏡が映し出すが如く、そのもの自身の姿を浮かび上がらせてはいたが、オウムの社会は鏡の中に映った仮想現実であった。

鏡は現実しか映さないが、映されていたものは同じ姿をしていても実態のない映像でしかない。オウムの信者の多くは、そのニセモノに捕われてしまったのである。

いったい何が「現実」で「非現実」なのか、という判断力を養うためにも、「宗教」を知り「哲学」を知る必要があるというのは、こういうことからくるのであり、今回の「オウム真理教事件」は学ぶべき多くの教訓を与えてくれた。教訓を教訓として「自覚」することこそが、まず第一の役割である。そのために果たす「宗教」と「哲学」の役割は、大きいであろう。また次に、「オウム真理教」のような思想を持った「宗教集団」に踏み入れないためでもある。

「宗教」だけでも、「哲学」だけ学んでもだめなのは、「宗教」だけを教えてしまうと場合によっては宗教が歴史上で繰り返してきた闘争を引き起こす可能性があるからであり、「哲学的分析」を含めることによって冷静に考える必要があるからである。

哲学や宗教を、戦後の日本の教育で教えられて来なかったことが罪であるのならば、すぐにも教えればよいのだが、そりよりももっと重要なことは、哲学と宗教の教育をどうやって実行にうつすかなのである。

## 註

- (1) J.B.カブ、D.R.グリフィン『プロセス神学の展望』延原時行訳(新教出版社、1993年)の「訳者あとがき」(295-6頁)、参照。
- (2) 新潟日報、1995年6月23日付「オウム用語」より抜粋。
- (3) 西田幾多郎氏の言葉の表現より借用。
- (4) 鈴木大拙『禅と日本文化』鈴木大拙選集・第9巻、春秋社、1961年、145頁。
- (5) 滝沢克己『仏教とキリスト教』より参考。
- (6) 中根千枝『タテの社会と人間関係』より参考。
- (7) 新潟日報、1995年3月22日付社説より抜粋。

## 参考文献

- 「悪夢の誕生—オウムの精神構造を解く—」『現代』1995年7月号  
「誰もが気になる宗教の『なぜ』」『The 21』1995年7月号

「オウム破滅—地下鉄サリン殺人容疑」『週間読売』臨時増刊、1995年6月1日号  
中根千枝『タテの社会と人間関係』講談社、現代新書  
滝沢克己『仏教とキリスト教』法蔵館、1964年  
『文藝春秋』七月特別号  
島田裕己『信じやすい心』PHP  
リチャード＝キャメリアン『洗脳科学』第三書館  
スティーブン＝ハッサン『マインド＝コントロールの恐怖』恒友出版